

『万葉集』の「雨間」の表現上の効果

福嶋俊彦

「万葉集」において「雨間」を歌中に持つものは次の四首である。

大伴家持雨日聞雲公鳥喧歌一首
宇乃花能過者惜香雲公鳥雨間毛不置從此間喧渡
(巻八・一四九一)

大伴家持秋歌四首
久堅之雨間毛不置雲隔鳴首去奈流早田雁之哭
(巻八・一五六六)

雨間開而國見毛將為乎故郷之花橘者散家武可
(巻十・一九七一)

十月雨間毛不置零尔西者誰里之宿可借益
(巻十二・三二一四)

「雨間」は、今日「雨の降り止んでいる間。晴れ間」の意とし用いられている。しかし、右に挙げた『万葉集』中の四首に關しては、今日と同じ意をもって解するには問題があるようである。

『万葉代匠記』精撰本において、一四九一の歌の条で、「雨間毛不置トハ、雨ノ降間ヲモサテオカスナリ」と述べ、「雨間」を「雨ノ降間」と解している。また、『万葉集古義』では一四九一の条において、この四首に對し次の様に述べてある。

「雨間毛不置は、雨零間も息ずの意なり、この雨間は、雨のふる間をいへるなり、此下に、久堅之雨間毛不置雲隔鳴首去奈流早田雁之哭、とある、全同じ、十二に、十月雨間毛不置零爾西者誰里之間宿可借益とある雨間は、雨の晴間をいへるなり、歌によりて意異れり、又十卷に、雨間開而國見毛將為乎、とある

も、晴間をいへるなり」

『古義』において「雨間」は「雨のふる間」と「雨の晴間」と二通りに解してある。『万葉集全釈』においても同じく、一四九一の歌の条に次の様に述べられている。

「雨間には雨の降つてゐる間と雨の晴間との二様の用例があるから、その場合を考へて解釈しなければならぬ。ここは前者で、雨の降つてゐる間もかまはずの意」

このように「雨間」に歌によって違った意を付し解しているのである。それも「雨の降っている間」と「雨の降り止んでいる間。」と全く相反する意を与えている。同一の語に対し全く相反する意を付し解釈するとはどういうことなのであろうか。

そこで本稿においては、「雨間」を持つ、一四九一、一五六六、一九七一、三二一四の四首を総合的に考察することによって、「雨間」の解釈上における問題を究明して行かうと思う。

二

まず「雨間」とはどのような空間であるか考えてみた

い。「雨間」もまた『万葉集』にある「雲間」「人間」「木間」「垣間」と同類の語と考えられる。そうすると例えば「雲間」が「雲と雲との間」の空間をさすことから、「雨間」もまた「雨と雨との間」の空間をさす語であると考えられる。

では「雨と雨との間」とはどのような空間であるか。私はその空間を考え図に描いてみた。左の図がそれである。

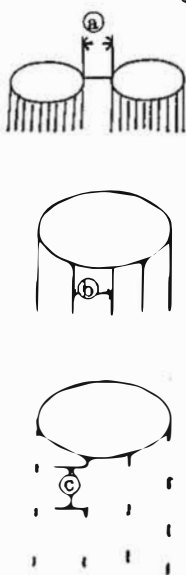


図 ①②③を「雨間」と考えた。①の空間は、雨雲と雨雲との間、一時雨の降り止んでいる空間である。②の空間は、線状に我々が視覚でとらえるものを雨としその間の空間である。③の空間は、雨粒と雨粒との間を「雨間」の空間としてとらえたものである。

「雨間」を①の空間と考えた場合、「雨間」は雨の降り止んでいる状態を指すことになる。しかし②③の空間を「雨間」と考えると、全体の状態からして、雨は降っているといえる。「雨間」が「雨と雨との間」の空間を意味するものであっても「雨」をどのように認識するか

によってその空間の様相は違ったものになってくる。「雨間」が「雨と雨との間」を指す語であることにはちがいないが、それがすぐ「晴れ間」と結びつくとは限らないのである。

このように「雨間」がどのような現象を意味するか明確に判断することは難しい。だが㉔㉕㉖の「雨間」に関して共通しいえることは、「雨」がどのような状態であれ、雨と雨との隔りを指しているということ、そしてその隔りは時間的空間的において短いものであるということである。私はこの「雨と雨との隔りの短さ」に注意したい。それはこの点に「雨間」のもつ重要な意味があると思われるからである。

三

「雨間」の現象面についての意を追うだけでなく、表現上の役割についても考えなければならぬ。そこで、「雨間」を持つ四首中一四九一、一五六六、三二一四の三首に共通する表現「雨間毛不置」を中心に置き考察の手をのばしていこうと思う。「雨間」を単独に考えるよりも、一つの表現の中の構成要素として考える方がよりその生きた意味をとらえることができると思う。

まず「雨間毛不置」の中で「雨間」を存在させ位置づける「不置」について考えてみたい。万葉集の中から「不置」を持つ表現を挙げ考えてみる。

過ニ辛荷嶋一時山部宿祢赤人作歌一首

味沢相^{あじはさふ} 妹目^{いめめ}不^ふ數^{かず}見^み而^て 數細^{かずさ}乃^の 枕毛^{まくらげ}不^ふ卷^{まき}櫻^{さくら}
 皮繩^{かわづな} 作流舟^{つくるふね}二^{ふた} 真梶^{まがは}貫^{くわ} 吾榜^{わがはたけ}来者^{きたり} 淡路^{あはぢの}乃^の 野嶋毛^{のしまの}
 過^ま 伊奈美^{いなみ}婦^ふ 辛荷^{からに}乃^の嶋^{しま}之^の 嶋際^{しまぎは}從^{より} 吾宅^{わがへ}乎^や見^み者^は 青^{あお}
 山乃^{やまの} 曾^{そこ}許^{もと}十^{じふ}方^{ほう}不^ふ見^み 白雲^{しろくも}毛^も 千重^{ちへ}尔^に成^{なり}来^き沼^{ぬま} 許^こ
 伎多^{きた}武流^{むりゅう} 浦乃^{うらの}盡^{ことごとく}往^{おもむく}隠^{しるまき} 嶋乃^{しまの}崎^{さき}々^々 限毛^{くも}不^ふ置^{おき} 憶^{おもひ}
 曾^{まづ}吾^{われ}来^{きたり} 客乃^{きやくの}氣^け長^{なが}弥^や
 玉緒^{たまの}之^の 間毛^{まの}不^ふ置^{おき} 欲^ほ見^み 吾思^{わがおもふ}妹者^{いめは} 家適^{いへにあて}在^あ而^を

(卷六・九四二)

右の二首において「不置」の持つ役割をみてみたい。九四二の歌においては「限毛不置」が挙げられる。「限」は「物に隠れて見えない所」の意である。「限毛不置」は「どんな場所さえ」という意にとれる。また歌全体の意は「妻に別れて その手枕もせず 桜皮を巻いて 作った舟に梶を逆して 漕いで来ると 淡路の

野島も過ぎ 印南つまの 辛荷の島の 島の間から
故郷の方を見ると 青山のどのあたりともわからず 白
雪も 千里に重なって来た 漕ぎめぐる 浦のすべてに
行き隠れる 島の崎ごととに どこへ行っても 思いつ
づけて来ることだ 旅の日数が長いので」となる。

「隈毛不置」は下の句の「憶曾吾来」を強調する役割
を果たしている。どのような所へ行こうと変わることなく
私は故郷を思う、という意になる。「不置」はその中で
「隈」を否定することによって思いの強さを表現してい
る。

次に二七九三の歌である。この歌においては「間毛不
置」を挙げる。「間」は「絶え間隔り」を表わし、「間
毛不置」は「絶え間なく」の意で、事柄の連続・継続
を表わす。この歌の解釈としては「絶えず逢いたいとわ
たしが思うあの娘は家が遠くて」となり、この中で「間
毛不置」は、恋しい人を思う気持ちの絶え間なさ、思
いの強さを表わしている。「不置」は「間」を打ち消すこ
とにより、恋する思いの強さを表現している。また、思
いの強さを表現する点で「隈毛不置」と「間毛不置」は
共通するものであると思う。

それから二七九三の歌の「玉緒」に注意したい。私は
この「玉緒」を単に枕詞とし技巧上の無意味な語とは考

えたくない。表現上なんらかの意味をもつものと考えた
い。「玉緒」の元来の意味は「一本の緒に玉を貫いた飾
り」である。このことから考えて、この歌において「玉
緒」は、緒に貫いた玉と玉とのほんの少しの隔りを表わ
し、それが「間」に懸り、「間」所謂「隔り」の短さを
強調する役割を持つていると考えられないだろうか。

「玉緒」が隔りの短さを表現するならば、「間毛不置」
は恋する人に対する思いの絶え間のなさを一層よく表わ
し得る。

これまでは「不置」が表現上どのような役割を果たして
いるかを考えて来た。九四二・二七九三において「不置」
は「隈」「間」を否定することによって、思いの強さを
表現するものであった。このことからして「雨間毛不置」
の「不置」にも同様な役割があるのではないかと思える。
「雨間」に「隔り絶え間」を表わす意があるならば「雨
間」は「不置」によって否定され事柄の連続を表わす表
現とみることが出来る。「雨間」が単に現象を指すので
はなく表現の中で意味を持つものであると考えられない
か。そうすると二七九三の「玉緒之間毛不置」も「雨
間」を持つ四首の歌と重要な関わりを持つものになると
思う。

四

次に関連づけ考えるべきものに「間」がある。『万葉集』において「間」は「アヒダ」、「マ」と読まれている。そこでまず、「間」と読まれているものの中で、前述の「不置」と同様、否定する語とともに用いられているもの、「間無し」について、『万葉集』中より挙げ考えてみたい。

山路道之 嶋乃浦廻尔 縁浪 間無牟 吾戀卷者

(巻四・五五一)

無間 戀尔可有牟 草枕 客有公之 夢尔之所見

(巻四・六二一)

風緒痛 甚振浪能 間無 吾念君者 相念磁香

(巻十一・二七三六)

大伴之 三津乃白浪 間無 我戀良苦乎 人之不知久

(巻十一・二七三七)

貞能 泊尔 依流白浪 無間 思乎如何 妹尔難相

(巻十二・三〇二九)

右の五首の「間無し」について考えてみる。この五首の「間」についていえることは、全て「隔り・絶え間」

を表わしているということである。例えば、五五一の場合、解釈すると、「大和道の島の浦辺に寄せる波のように絶え間もないでしょう私の恋は」となる。このように「間」は、「絶え間」を意味している。そして「間無し」となることによって「絶え間」は否定され、恋しい人を感じる気持の「絶え間のない」様を表わしているのである。このことは他の四首においても同様にいえることである。

次に「間」と読むもので、「間」の意味を考える上で重要な関わりを持つと思われるものを挙げる。

天皇御製歌

三吉野之 耳我嶺尔 時無曾 雪者落家留 間無曾 雨
者零計類 其雪乃 時無如 其雨乃 間無如 隈毛不
落 念乍叙来 其山道乎

(巻一・二五)

大伴坂上郎女從二竹田庄一贈二女子大嬢一歌
打渡 竹田之原尔 鳴鶴之 間無時無 吾戀良久波

(巻四・七六〇)

戀衣 著櫛乃山尔 鳴鳥之 間無時無 吾戀良苦者

(巻十二・三〇八八)

衣袖之 真若之浦之 愛子地 間無時無 吾戀鐘

(卷十二・三一六八)

右の四首は「間無し」を用い且つ「時無し」を持つ歌である。「間無し」と「時無し」を対比さすことによつて、「間」の意味を考えてみたい。

まず二五の歌を解釈してみると「吉野の耳我の嶺に絶え間なく雪は降っている。絶え間なく雨は降っている。その雪の絶え間のないように、その雨の絶え間のないように、道の角々一つ残さず、思いに沈みながらやって来る。その山道を」となる。意味の上では「時無し」も「間無し」も同様に「絶え間なく」の意としてとらえられる。他の三首においても同様である。

しかし「時」と「間」の語には何んらかの相違があると思える。この点について沢瀉久孝氏の『万葉集注釈』では次の様に考察されている。

「時なく」も「間なく」も結局同じ事になるが、少し委しく云へば「時」はある定つた時、即ち春は櫻の咲く「時」であり、秋は楓の紅葉する「時」であるわけになり、「間」はその「時」と「時」との間、即ち雨の暫くやんである間が「雨間」(十二・三二一四)であり、人のうるさい噂が少しとだえている

間が「人言の繁き間」(十一・二五六一)であるわけになる。この「時」と「間」との関係は今の人も理解されるところであり、本来は「時なし」と「間なし」とは表と裏とのやうに使ひ方が違つてゐるわけであるが、結果においては、しよつちゆう、のべつに、といふ事になるわけである。

このように『万葉集注釈』では「時」と「間」の相違が述べられている。「時」が一定の時点を表わすのに対して「間」は二つのものにはさまれた空間を指すものとされている。そしてその空間は「隔り 絶え間」所謂事柄の中断を意味するものであると考えられる。また『万葉集注釈』では「雨間」にも同様な意味があると述べてある。「雨間」にもそうすると事柄の中断、「隔り 絶え間」を表わすことができるということになる。「間無し」がその「隔り 絶え間」を否定することによつて事柄の連続を表わすものなら「雨間毛不置」も「雨間」という「隔り 絶え間」を「不置」によつて否定することにより事柄の連続を表わすものと考えられる。

五

これまでは「間毛不置」「間無し」など「間」を否定

する語をともなった表現についてみてきた。これからは「間」を「置く」、また「雨間開而」の様に「間」を「開ける」という肯定的な意味を持つ語とともに用いられ

た「間」について考えてみる。
まず「間」を「置く」というものを『万葉集』より挙げてみた。

酔蛾嶋之 夏身乃浦 依浪 間文置 吾不念君

(卷十一・二七二七)

左佐浪之 浪越安 整仁 落小雨 間文置而 吾不念国

(卷十二・三〇四六)

保登等藝須 安比太之麻思於家 奈我奈気婆 安我毛布
許己呂 伊多母須敝奈之

(卷十五・三七八五)

右の三首の解釈は次の様になる。二七二七「酔蛾島の夏身の浦に寄せる波のように間をあけて、わたしは思ったりはしません。」三〇四六「楽浪の波越す安整に、降る小雨のように間をあけて、わたしは思ったりはしません。」三七八五「ほととぎすよ、間を少し置け、おまえが鳴くとわたしの心はどうにもしかたがない。」

まず初めに、二七二七と三〇四六の歌について考えて

みる。肯定的意味を持つ「置」をともなった「間」であるが、歌全体の解釈からすると「間」は否定されていることがわかる。またここにおいても「間」は「隔り、絶え間」を意味し、そしてその「隔り、絶え間」は「間毛不置」「間無し」の場合と同様否定され、恋しい人と思ふ気持ちの絶え間のない様を表わしている。

それから、三七八五についてであるが、この歌の場合は逆に「間」に存在することが求められている。だがこの「間」もまた恋しい人を感じる気持ちを強く表わす役割を果たしている点において、二七二七・三〇四六と共通する。

この三首において特に注意する表現として三〇四六の「落小雨 間文置而」の箇所をあげたい。この「落小雨」は、前に挙げた二七九三の「玉緒」とは逆に、「間」の長いこと所謂隔りの長いことを表わすものと考えられる。だが「落小雨」もまた、「間」の長短は別として、「玉緒」と同様「間」に懸り、その意味を強調するものであると思える。

次は、「開」を伴った表現「間開」について考えてみる。『万葉集』中、「間開」の例は次の一首である。

白玉 間開作 貫緒 綱依 復相物

(卷十一・二四四八)

六

右の歌の解釈は「白玉の間を置いて通した緒でも、くぐり寄せると、また合うというのに。」となる。「間開」とは「隔りをつくる。」という意にとれる。ここにおいても「間」は「隔り」を意味するものとして用いられている。また「白玉」しらたま「間開」あだあけの「白玉間」についてであるが、これは前に挙げた三七九三の「玉緒之間」と同じ形の表現と考えられる。「白玉間」も「玉緒間」も玉を緒に通した時にできる玉と玉との間を指している。ただ「玉緒之間」はその「間」の短かいことを表わすのに対し「白玉間」は「間」の長いことを表わしている。この点においては、三〇四六の「落小雨間」と共通するものである。そして「白玉間」「玉緒之間」「落小雨間」に共通する点として、三つの表現のどの「間」も否定されることによって恋しい思いを強調しているという点があげられると思う。

この章においては「間」を、「置」「開」という肯定的意味をもつ語とともに考えてみた。結果としてわかったことは、「間」には前章からの考察と同様「隔り 絶え間」の意味があるということ、そして「置」「開」も歌全体からみると否定されているということである。ここにおいても「間」は否定されることによって事柄の連続を表わしていた。

この章ではこれまでに考えたことを整理してみる。

まず、「間」についてである。「間」には「隔り、絶え間」という意味があること。そしてその「隔り、絶え間」は極めて短い時間なり、空間を示すものとして用いられている。「雨間」の「間」にも同じことがいえる。

次に「間」と「不置」「無し」との関わりであるが、この場合「間」の持つ「隔り・絶え間」の意は否定され、そうすることによって事柄、特に恋しい人に対する思いの絶え間のない様を表わすのである。また、「置」「開」とともに用いられても歌全体の意から「間」は否定され、「不置」「無し」の場合と同じ意を表わす。

そして「玉緒之間」「落小雨間」「白玉間」と「雨間」の関りである。「雨間」の「間」にも他の表現の「間」と同様「隔り 絶え間」という意味が認められるということから、「雨間」の「雨」は「玉緒」「落小雨」「白玉」と同じように「間」に戀り、その「隔り 絶え間」を強調するものであると考えられる。こう考えると「雨間」が「隔り・絶え間」を表わすということがより明確なものになる。「雨間」は単に現象を表わす語ではない

と私は思う。「雨間」は事柄の隔り・絶え間を意味するものであると思う。「雨間毛不置」「雨間開而」の様に一つの表現の中でその本来の姿を現わす語であると思う。「雨間」の現象面の意味だけを考えることは、単に解釈の混乱を招くものであると思われる。

今までに考えたことを踏まえ次の章では、実際に「雨間」を持つ四首、一四九一、一五六六、一九七一、三二一四の歌にあたることにより「雨間」の持つ意味をより明確にしてゆきたい。

七

大伴家持雨日間^ニ 霍公鳥喧^一 歌一首

宇乃花能 過者惜香 霍公鳥 雨間毛不置 從此間一
喧渡 (一四九一)

この歌において、詞書の「雨日」からして「雨間」を、「雨の降っていない間」とするのはおかしい。だが単に「雨間」を、「雨の降っている状態」とだけ解釈することとは、この歌全体を平板なものにしてしまうように思う。また、この歌の主体である霍公鳥と雨との関わりも問題である。従来の解釈通り「雨間」を「雨の降っている

間」と解すると、鳥と雨との関係がおかしくなるように思う。鳥が雨の中を飛ぶであろうか、仮に飛ぶと考えて、雨の中を飛ぶ霍公鳥に対し、作者家持は何を感じ思ったのか、雨と霍公鳥と作者この三者の関わりがこの歌の重要なポイントである。

そこで、これまでに考えたことを使ってこの点について考えてみる。

「雨間毛不置」を、事柄の絶え間のない様を表わす譬喩的な表現として考えてみる。「雨間」の「雨」を、前述の「玉緒」「落小雨」「白玉」と同様に「間」に関り、その意味を強めるものと考え「雨間」を「極めて短い隔り、絶え間」とし、そして「雨間毛不置」を「極めて短い隔りもなく」と考えてみる。すると、歌全体は「卵の花が散るのが惜しくてなのか、霍公鳥が、雨と雨との短い間もおかず、絶え間なく、ことを鳴き渡ってゆく。」と解釈でき、雨と霍公鳥と作者の関わりが無理のないものとして表われてくると思える。

「雨間」の現象的意味を離れ、一つの表現の中での効果を考えることが、歌全体を生きたものにすると思える。同様なことは、次の一五六六の歌の場合においてもいえると思う。

久堅之 雨間毛不置 雲隔 鳴曾去奈流 早田厲之哭

(一五六六)

この歌においても「雨間毛不置」を単に現象面の意味でとらえるよりも「絶え間なく続く」という意味を持つ譬喩的な表現と考えることによって、雁がしきりに鳴いて行く情景が鮮かに浮びあがってくる。間をおかず鳴くのは雁の意志であり、その点で「置」という他動詞表現が生きる。

次に三二一四について考える。

十月 雨間毛不置 零尔西者 誰里之 宿可借益

(三二一四)

従来の説においては、この歌の「雨間」は「雨の降り止んでいる間」とされている。ここにおいても「雨間」の現象の意味に重点がおかれ解釈されて来ている。「雨間」の現象の意味については、本稿の最初で述べたように明確な判断をくだすことは難しい。この歌においても前の二首の場合と同様、「雨間」を一つの譬喩的な意味を持つ語と考え、「雨間毛不置」を十月の時雨が「絶え間なく続く」という一つの意味を持つ表現と考えるべき

だと思う。

「雨間」の現象面に重点を置き追求することは、単に解釈の混乱を招くものであって、その歌における「雨間」の効果を減退させるものであると思う。

最後に、「雨間開而」を中心に一九七一の歌について考えてみたい。

雨間開而 國見毛將為乎 故郷之 花橘者 散家武可
聞 (一九七一)

四首中この歌においてのみ「雨間」は「開」と結びついている。

「雨間開而」の表記について『万葉集全註釈』は「雨間開而」とするが、諸本の状態から考えてそう読むのには無理があり、やはり通説のように、「あままあけて」と読むのが適切である。その場合「開」では他動詞であるから、「晴れ間があく」と解釈するのはおかしい。

「雨間」をあけるのは、この歌の主体である作者自身でなければならぬ。「雨間」は作者の意識によって開けられるのである。

「雨間」を前述の㊶㊷㊸のどの空間と考えるにせよ、雨と雨とのごく短い空間であることには違いない。それ

開けるとは、本来しげしげとする因見を、少し間を開けてすることであり、そしてその少しの間因見をしなかったことで、故郷の花桶が散ってしまったのではと作者はいぶかる。ここにおいても「雨間」は行為の絶え間を表わしていると考えられる。

「雨間」を開けるのは作者の意識によって開かれる点と「雨間」は行為の絶え間を表わすという二つの点がこの歌の解釈の上で重要な意味を持つと思う。「雨間開而」も「雨間毛不置」と同様、一つの譬喩的な役割を持つもので、その中において「雨間」は意味を持ち得ると考えられる。

この四首を考察することによって「雨間」の持つ意味がより明確になったと思う。やはり、「雨間」には事柄、行為の絶え間を表わす意があり、それは「雨が降っている間」か「雨が止んでいる間」かというような現象面の意味より歌との関わりにおいて重要であると思える。

「雨間」は一つの表現の中に組み込まれることによってその役割を果たすものである。

(本学三年在学)

所見

この論文は、『万葉集』に見える四例の「雨間」が「雨の降り止んだ間」「雨の降っている間」という二つの相反する解釈がされているのに疑問を感じ、それを統一した立場で説こうとしたものである。歌の内容によって、同じ言葉が二様に解釈されるのは確かに異様であり、福島君は、その点にナイーブな感受性をもって肉迫する。表現は、いまだ未熟であり、論証にもたつきが見られるが、その言わんとする所はわかる。それは要するに「雨間」の解釈に、その現象面を見ず、表現性を重視すべきだというのである。その分析の方法は、「雨間」を単独で捉えず、「雨間を置かず」とか「雨間を開けて」とかいったフレーズで考え、それと「間無し」「限も置かず」「間も置かず」といった、「間」を否定してゆく一連の表現形式の関係において意味を決定してゆくやり方である。それは、広く言えば、言語の意味とその運用の問題にかかわる。

そうした福島君の論点を補うべく、若干の説明を加える。「雨間も置かず」という表現の中で確認して置かねばならぬのは「置く」の基本的な意味である。仮りに『時代別国語大辞典上代篇』の分類に従えば、それは「①降りどどまる②物を置く、供える、設ける③さしおく、

放っておく④残して置く、後に留め置く⑤時・空間などをへだてる」といった意味に分けられる。これらは、要するにある物によって一定の空間を占めることをいう。「雨間」を雨と雨との間とするならば、それを置くとは、天候がその空間を設けることである。家持の一四九一の場合、「霍公鳥雨間も置かず」を文字通りに解すれば、霍公鳥が雨と雨との間（晴れ間）を置かずとなり、意味が通じなくなる。そこで沢瀉久孝氏は、雨の降る間も置かすの意で、「家持の誤用」（新釈下巻七五頁）とされたが、佐伯梅友氏は「万葉集小考 雨間」（『万葉語研究』昭和三十八年四月）において、「事實は消極的に雨の止むのを待つものではあるが、それを言葉の上では積極的に雨を止ませるといふのである。然らば鳥が雨間もおかずとぶといふのも、同様に事実としては雨のはれまを待たずに、降つてゐる中をかまはず飛ぶのであるが、いひ方としてかういふいひ方をしたとも考へられるであらう。」と論じ、「雨間を置く」を「雨間開而」と同じように、雨の晴れ間を待つ意とされた。しかし、「置く」は、既に見たように、何かが一定の空間を設けることであり、待つ意はない。この場合、「雨間を置く」の主体は、あくまで霍公鳥であり、その意志として雨間を置かず鳴き渡るのでなければならない。

この点を福島君は、「間無く」や「間も置かず」という表現から推して、譬喩を加味して説く。即ち、情景としては、雨中を霍公鳥が鳴き渡るのであるが、雨間を置かず降る雨の短い間も置かず、間断なく霍公鳥が鳴き渡るさまとみる。片恋の鳥が間断なく鳴き、それが恋する男の心を悩ますという趣向は、卷三・三七二の赤人の「容鳥能 間無数鳴……其鳥乃 片恋耳二……念曾吾為流」（あまのり） まなくはなむ …… あらひの かたりのこゝろにの歌に見られる。恐らく、一四九一の歌の卯の花は、霍公鳥の恋人に見立てられていて、それが過ぎる、つまり妻にする時期を失することを惜しみ、霍公鳥が雨中を鳴きながら飛ぶといった寓意がこめられているのであろう。同様に、一九七一の「雨間開けて」も、単に雨の晴れ間を待つといった消極的な態度ではなく、男が何かの理由で間を開けて国見をせざるを得なくなり、その間に散るかもしれない花橋に懸念を示したものである。それが譬喩的であることは、例えば、卷十一・二四四八の「白玉の間開けつつ貫ける緒も」にならって、この歌を「降る雨の間開けつつ国見せば」と言い直してみれば納得がいくだろう。この場合は、実際に五月雨が晴れ間を作る、そのように間を開けていうように、現実を作者の意識に取り込んでみるとみるべきであろう。

（教授 赤羽 学）